

## 巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会  
第13期ゼミ長 小黒 祐貴

『慶應マーケティング論究』第13巻には、慶應義塾大学商学部小野晃典研究会第13期生が、本研究会における研究の集大成として取り組んだ11篇の卒業論文をはじめ、チームを結成して取り組んだ三田祭論文や、国際的な評価を得て国外の著名な学会で発表した英語論文などが収められている。この論文集は、第13期生が2年間の歳月を掛けて、心血を注いで完成させた作品であり、苦心と努力の結晶である。

私たち第13期生が初めて論文執筆に取り組んだのは、3年生時の夏頃からである。入会して間もなく、論文の「ろ」の字も知らない私たちは、2つのチームに分かれて、論文活動に取り組み始めた。片方は、関東で最も優れた学生論文の執筆を目指す「日本語論文チーム」、もう片方は、国際学会に投稿し、自分たちの論文を世界に向けて発信することを目指す「英語論文チーム」。どちらも普通の学生では考えられないような高い目標を掲げて、論文執筆への第一歩を踏み出した。もちろん、その執筆活動は、決して平らな道ではなかった。探し求めている文献が見つからなかった時や、分析がうまく回らない時には、大きな研究の壁を感じた。また、共著での論文執筆である故、人間関係に問題が生じることや、お互いの意見が食い違うこともあり、チームワークの難しさも感じた。しかし、執筆当初から高い目標を掲げ、その目標を最後まで全員で共有出来ていたからこそ、全員が同じ方向を向いて、途中で投げ出すことなく、質の高い論文を完成させることが出来た。そして、私たちの執筆した論文は国内外で評価され、当初の目標を達成することが出来たのである。

3年生の内は、三田祭論文執筆活動やビジネスコンテストへの取り組みなどグループでの活動が多かったが、4年生になると、卒業論文という個人での大きな活動を迎えることとなる。個人作業において、最も大変になるのは精神面の問題である。共著で論文を執筆していた頃は、チームワーク上の問題はあったものの、辛い時には励まし鼓舞してくれるチームメイトが常に周りにいて、精神的な支えとなっていた。しかし、卒業論文の執筆は、1人の世界であり、私たちは、多くの困難を1人で乗り越えなければならない。そのため、執筆の過程において壁にぶつかり、行き詰ってしまうゼミ生もいたが、困難を乗り越えて、最後まで自分たちの好きなテーマで論文を執筆し続けることが出来たのは、自分たちの研究に自信があり、研究自体を楽しむことが出来ていたからであろう。

第13期生の特徴は、常に高い目標を持ち、内に秘めた負けん気が強いところであると思う。第13期生は、全員が有志活動のコンテストに参加しており、全員が高い評価を得て優れた賞を獲得する経験をしている。誰かが賞を取ると、自分たちも負けじと活動に力が入り、より高みを目指そうとする。その想いは決して外には表さないが、静かに自分たちの心の中で燃えている。向上心の高い同期が集まったからこそ、私たちは、切磋琢磨し、論文やコンテストにおいて満足の行く結果を残すことが出来たのだろう。

小野ゼミに入会するまで、第13期生のほとんどは、他者より秀でた才能を持つわけでもなく、誇れる経験をしたこともないような学生であった。しかし、この小野ゼミでの2年間の活動は、確実に私たちにとって自信を与える経験となり、私たちは胸を張って社会に出られるような人間へと大きな成長を遂げることが出来た。

こうして、私たちは、充実したゼミ活動を過ごし、この論文集を完成させることが出来た訳だが、その裏には多くの人々の支えがあり、彼らから言葉では表しきれない程の恩恵を受けてきた。末筆ながら、第13期生を代表して、私たちを支えて下さった皆様に感謝の意を述べさせて頂きたい。

まずは、同研究会第14期生の後輩の皆。三田祭論文などの活動が忙しい時にも、私たちの卒業論文のために貴重な時間を割いて、調査や文章の校正に協力してくれた。本当にありがとう。

次に、同研究会第12期生の先輩の皆様。先輩方には、論文指導だけではなく、精神面においても支えて頂いた。私たちが執筆に苦しんでいる時に、優しく声を掛けて下さり、その度に、一篇の論文を執筆し終えることの素晴らしさを教えて下さった。先輩方のアドバイスは、私たちにとって心の支えになった。ありがとうございました。

さらに、元大学院生の菊盛真衣さん(第7期OG)、白石秀壽さん(第9期大学院OB)、現役大学院生の竹内亮介さん(第9期OB)、石井隆太さん(第10期OB)、中村世名さん(第10期OB)、王皓瑩さん(第10期大学院OG)、廖舒忻さん(第11期大学院)へ。大学院生の皆様の懇切丁寧な指導がなければ、この論文集は完成していなかったと思う。特に私たちは、大学院生に頼りすぎた代であり、多大な迷惑をお掛けしたと思うが、どんなに忙しい中でも、大学院生の皆様は、熱心にかつ優しく指導して下さいました。本当にありがとうございました。

そして、家族へ。私たちの勝手な都合に付き合ってくれたおかげで、私たちは、小野ゼミという研究に没頭出来る最高の環境で不自由なく研究することが出来た。帰宅が遅くなり心配をかけたことも多かったと思うが、家に帰るといつも家族が温かく見守っていて下さり、私たちにとって励みになった。これからは、このゼミで学んだ経験を活かして、しっかり親孝行して参りたいと思う。本当にありがとうございました。

最後に、慶應義塾大学商学部教授の小野晃典先生へ。先生は、今思い返すと恥ずかしいほど未熟者であった私たちを、途中で見捨てることなく、最後まで教育して下さいました。当初は、先生のご負担を考えて、論文チームを2つに減らしたものの、私たちのわがままで、その分多くの有志活動に参加するなどして、結局は変わらぬ量のご負担をお掛けしてしまいました。忙しい中でも、時と場所を問わず、私たちの相談に熱心に乘って下さり、我が子のようにご指導頂いたことは、一生忘れることはありません。先生のご指導があったからこそ、私たちは、充実したゼミ活動を行うことが出来、そして、その集大成として、この論文集を完成させることが出来ました。ご自身の生活を犠牲にしてまで、私たちの面倒を見て頂き、本当にありがとうございました。

2017年3月吉日